

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate

vol. 3

【特集】

これまでの算数・数学教育／これからの算数・数学教育
教科横断による共創する学びへの挑戦

専任が語る

「家庭教育」って何だろう？
宿題は「残業」なのではないか？
「目を凝らし、耳を澄ます」

教育の最新事情

STEAM 教育とは？～その潮流から可能性を探る～
コラム：センス・オブ・ワンダーを研ぎ澄ます！
—科学の目と科学のこころを育む学びのあり方の探究—

学校探訪

私立 自由学園女子部中等科・高等科

P3 先達から学ぶ

【特集】これまでの教育／これからの教育

これまでの算数・数学教育／これからの算数・数学教育

【特集】教科横断による共創する学びへの挑戦

P9 教育の最新事情

STEAM教育とは？その潮流から可能性を探る

コラム：センス・オブ・ワンダーを研ぎ澄ます！

— 科学の目と科学のこころを育む学びのあり方の探究 —

P12 専任が語る

「家庭教育」って何だろう？

宿題は「残業」なのではないか？

「目を凝らし、耳を澄ます」

P18 学校探訪

私立自由学園女子部中等科・高等科

P22 先輩はもがく、されど進む

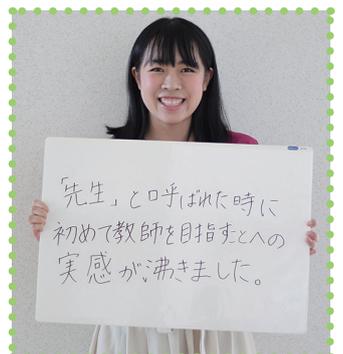
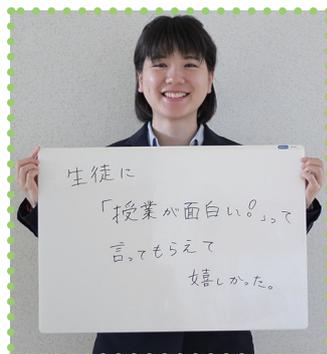
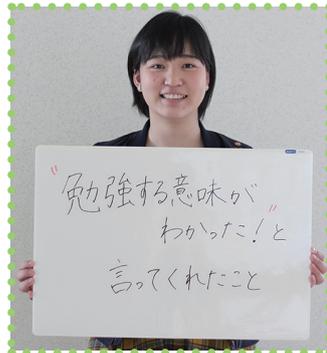
平成二十九年度卒のみなさん

イマドキ学生に聞きました 教育実習でうれしかったことは？

教育実習を終えた4年生に、
実習中に一番うれしかったこと
を聞いてみました！

生徒との思い出ばかりが並
んだことから、実習中の生
徒との関りがみなさんを励まし
てくれたことが伺えますね。

本当におつかれさまでした！



【特集】

これまでの算数・数学教育 / これからの算数・数学教育

新しい学習指導要領は小学校、

中学校については2017年3月に、高等学校については2018年3月に告示されました。教育現場の先生方には、まず自信をもってこれまで研究を重ね、取り組んできた実践、指導法等について振り返っていただきたいと思っています。その上で新学習指導要領とこれまでの学習指導要領を的確に比較し関連付け、これからの算数・数学教育のあり方を探って、より充実を図っていききたいと思います。

1 これまでの算数・数学教育

1989年でした。東京都某市の算数の研究会に同行させていただいた講師の先生が、そこで「問題解決学習」を提案されました。算数の授業では新たな知識等を獲得させる際にも、まず問題を自力で解決させて……という提案に対して、参加者の先生方は「そんなことをしたら多様な考え方が出てまともらない。まともらないのは知識を教えられないに等しい」また、「問題を解けない子はどうするのか」。個別にヒントを与えればよい、多人数なら集めて指導したらどうか。この提案にも、「分からないことが周りに知れて恥をか

かせる」と大反対の声ばかりでした。

「問題解決」という用語は算数・数学教育において、NCTM(全美数学教師協議会)が1980年に発効した「アジェンダ (An Agenda for Action)」の中の第一勧告に「問題解決が1980年代の学校数学の焦点とならなければならない」と掲げられ、世界に衝撃を与えました。数学の授業では問題解決の場を設定しその能力を高める、また、新しい数学の概念や技能をも問題解決の過程を通して獲得する、ということが勧められました。

我が国においても問題解決の授業研究はすでに1980年前半にはスタートしていました。また、「問題解決」の用語はこれまでの学習指導要領の第1章総則「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」からも見て取れます。

・1998年告示

小学校:第5.2(2) / 中学校:第6.2(2) 各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や問題解決的な学習を重視するとともに、児童(生徒)の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。

・2008年告示

小学校:第4.2(2) / 中学校:第4.2(2) 各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童(生徒)の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。
(1989年告示では小・中学校とも自主的、自発的な学習の文言のみ。)(下線は筆者)

1998年の改訂以降、総則に問題解決的な学習が示されているということは、算数・数学のみならず、全教科等の授業で実施するよう求められているということです。

私は学生たちが教師になった場合に、すべてが問題解決型の授業ではないにしても、基本は問題解決型を行うこととし、大学ではその展開で指導案を作成させ模擬授業を行わせています。

2011年です。学生が教育実習から戻り、私の教えたような算数の授業は行われていなかった……と報告しました。そのときから10年近くたった今、教育実習を終えた学生の報告や実習校はじめ、その他小中学

校含め参観する算数・数学の授業は「問題解決型」になっています。徐徐にはあるが算数や数学の授業は問題解決型で実施されているといえそうです。ただし余談ですが、本学の学生のほとんどは、数学の授業は教師が問題の解き方を説明し演習問題を「同じように解いてくらん」というイメージが強いようです。

学生へは今後とも大学で指導するとして、教育現場での課題は、問題解決型の授業が真に充実しているのか、さらに今後もう少し研究が必要な新たな部分はあるのか、それは何なのか……であると考えます。

2 これからの算数・数学教育

2018、2019年に告示された小・中・高等学校の新学習指導要領の算数科・数学科の目標の冒頭はすべて「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。(下線は筆者)」となりました。

このように「活動を通して」を育てるような表記が教科の目標にあるのは、1998年の小学校・高等学校の算数・数学からです。(1998年中学校は「数学的な活

動の楽しさを知る」に止まる)ただし小学校における名称は1998年、2008年ともに「算数的活動」でした。今回小学校も「数学的活動を通して」に、中学校は2008年から「数学的活動を通して」となっています。ここでは「算数的活動」についての説明は省きますが主体的な問題解決の活動と同様であるといえます。

小・中・高等学校で統一された「数学的な活動」とは「事象を数学的に捉え、数学の問題を見出し、問題を自立的、協働的に解決する過程を遂行する」ことです。まさに問題発見と問題解決の過程です。(図1参照)

1参照) 「数学的活動を通して」を育てる」ということは、すなわち算数・数学の学習過程に数学的な活動を位置づけるということで、これまでも教育現場が実践を重ねてきたことです。

加えて新学習指導要領総則には指導計画の編成や実施に当たり小・中・高等学校共通して、さらには全教科等を通して「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が掲げられています。

これが実現できているかどうかを

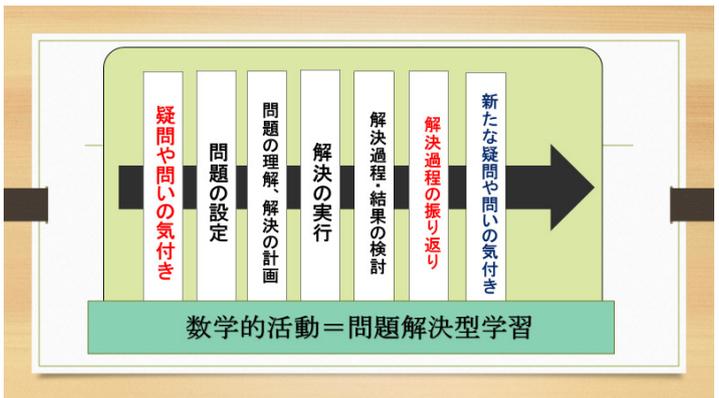


図1 数学的な活動

に行うためにも、自分なりの考えを持ち寄ることが基本だからです。学級全体でやり取りをしてヒントを与えるのではなく、解決の計画が立った子どもはそのまま進め、助言が必要な子どもには自力解決を促すヒントを……などの「個に応じた手立て」を充実させる必要があると思います。

② 考えを持ち寄った「対話」では「同じ考えだ」とつぶやいて終わりではないでしょうか。2人の考え方が異なっていたり食い違っていたりした場合、どのように話し合えばよいのでしょうか。話し合い方の指導が必要です。

対話が成立することも「学び」とするためには「相手の考えを理解する」はもちろん、「どうしてそんな計画を思いついたか明確にする」「解や解決過程は正しいか否か検討してその根拠を持つ」「よりよい解決策はいずれか、あるいはほかにあるのか比較検討する」ことなどがあると思います。これらを説明したり質問したりできるように指導しておく必要があります。

① これまでも多くの授業では、おおよそ図1の「問題の理解・解決の計画」「解決の実行」「解決過程・結果の検討」は自力解決です。「時に協働的に」ということから学級全体や小グループ等で解決することも問題や子どもの実態によってはあるかもしれませんが、基本は「自力解決」が期待されます。「対話」を主体的

③ 図1の「疑問や問題の気づき」「振り返り」については、とくにこれまでの取組みは十分とはいえない

○中学2年「1次関数」(10/20)

- (1) ねらい：1次関数のグラフの2点の座標から、その1次関数を求めることができる
- (2) 展開

時間	具体的な学習活動	指導上の留意点・配慮事項
導入 10分	・前時の復習(1次関数とは。切片や傾き、グラフ上の1点からの1次関数の求め方)	・全員理解を目指す ・時間をかけすぎない
展開 35分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 例3 yがxの1次関数で、そのグラフが2点(2,3)(5,9)を通るとき、1次関数を求めなさい。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・個人で考える ・5分後4人グループで互いの考えを共有する ・いくつかのグループの考えを板書 	<ul style="list-style-type: none"> ・進まない生徒には、おおよそのグラフをかいて考えるように促す ・グラフの傾きを求める方法と連立方程式から求める不法の両方が導けるように声かけをする
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 例4 次の条件をみたく1次関数を求めなさい。(2問：略) </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・終わった生徒は「もつと練習」
まとめ 5分	・本時の学習内容の確認	・問題集に取り組む

いかと思います。例えば授業の後半では知識や技能をまとめることが多いと見られます。子どもが働かせた学的な見方・考え方、役に立ったもの、うまくいかなかったわけなども振り返って見方・考え方を鍛えているでしょうか。さらに、既習の内容との関連性を整理して統合したり「こんな場合でも使えるだろうか」と発展的に考えさせたりしているでしょうか。これにより数学の問題は与えられるものでなく、発見につながる

と考えると考えます。そして子どもの問題意識を大切にしたい「単元全体の展開」も見えてくると思われます。

最後に「中学校2年・1次関数」の実際の授業を例にして具体的に提案します。指導した先生は教職3年目の方。生徒とのやり取りの雰囲気がかつてもよく、信頼関係の深さがうかがわれました。生徒の自力解決の際、先生は机間指導によく動き回って個に応じた助言を心がけていまし

た。

①「復習」は必要ですか。

中学の数学は週3、4「マ」の実施ですから「復習」を行う習慣があるのかもしれない。約15分間、数名を指名しながらやり取りし、黒板に式やグラフを書いて確認しました。生徒は「……という」と「下を向いている子」「きよきよしている子」が5名ぐらい。

彼らは後の自力解決では「自分で解ける子」「解けない子」の両方でした。復習で「全員理解」を目指すことも「復習したら本時の問題の解き方に気づくのではないか」という教師の期待も十分には果たせないということ。問題を解く必要なら生徒本人がノートや教科書の前のページをめくって思い出す……などの主体的な姿に変えたいと思いません。

② 数学の問題は教師や教科書から与えられるものですか。

例えば前時の授業の後半「振り返り」で、「切片ともう1点」あるいは「2点」の座標からも1次関数は求められるのではないかと生徒が発見できたかもしれません。

仮に本時の問題を与えたとしても「これまでの問題とどこが違う?」と

問い、既習との違いを明確にすると、今後生徒自身が新たな問題を自分で作っていく際の視点になると思えます。

③ 指導案には「自力解決が」進まない生徒には、おおよそのグラフをかくよう促す」とありましたが実際は行いませんでした。自力で解けなかった生徒は話し合いの場でも困っていて、別の生徒に「連立して」「代入して」「そのあとは……」と言われても難しかったようです。先生の肉声で、より具体的に既習を想起させるなどの個に応じた手立てが必要でした。

一方で「解決したら別の方法でも解決してみよう」と指示してしました。これは進んだ子への手立てとして有効でした。

④ 生徒のノートを画面に写し出す、別の生徒がそれを解説する……などして生徒自身に発表させたかったですが、それ以上に「どこに目を付けたのか」「求めた式が正しい根拠は」などと生徒に突っ込んで問い、問題文の「1次関数」の定義に着目する見方や、式による表現とグラフによる表現を関連付ける説明を引き出すなどして「深い学び」へ近づけてみたかったです。

【特集】

教科横断による 共創する学びへの挑戦

1. 古くて新しい問題

「今後の学習指導要領改訂で「社会に開かれた教育課程」が基本理念として掲げられました。教科等横断的な視点から教育活動の改善を図り、教科等や学年、さらには学校の壁を越えたカリキュラム・マネジメントの実現が各学校に求められています。「教科をこえて、社会にひらく!」、そして、その先はどういった「主体的・対話的で深い学び」や「探究的な学び」を生み出そうとするのか、「チーム学校」のクリエイティブティが問われています。

しかし、理念は分かる、でも実際にはどうすればいいの? 学校現場からはそんな声が漏れ聞こえてきます。学術的には「カリキュラム統合」という主題で議論が積み重ねられており、様々な実践も歴史的に試みられてきました。とはいえ、「言うは易く行ふは難し」なのが正直なところ

です。とりわけ、中等教育でうまくいかない、なかなか受け入れてもらえないという現実があります。例えば、総合的な学習の時間は学校段階が上がるにつれて、各教科との結びつきを失い、形骸化してしまうくらいがあります。また、教科学習もど

どん専門分野に細分化され、相互の関連性を失うことでタコツボ化の様相を見せます。いずれも教科担任制の弊害と言えるかもしれません。あわせて、受験対策という現実的な問題に直面することで、それらはますます深刻化することになります。すなわち、教育改革の主たる舞台は中等教育、特に高等学校にあるのです。その教育をどう変えるのが最大のポイントになります。

2. 共創する学びへの招待

教科等横断的な視点から教育活動の改善を図る際、各教科間で育てたい資質・能力を共有することも、各教科等における教育内容の全体を見渡し、可能な限りの関連性を見出すことで、効果的な指導に生かそうとする方法が採用されることがあります。その努力自体には価値や意味があり、教師集団の協働性や同僚性を高めることにもつながります。ただ、そのために必要となる労力は相当なものであり、必ずしも現実的ではありません。

そこで私たち昭和女子大学現代教育研究所では、次のような方法を提案しています。すなわち、中等教育カリキュラム・デザインにおいて、①

総合的な学習の時間の充実に注力し、その理念をしっかりと具体化できるようにする、②特別活動と有機的に結びつけ、探究的な学びのデザインを中心にすすめる、その際、③生活に根ざしたトピックを設定し、そのトピックを介して各教科学習との結びつきを生み出す、④当該単元に関しては各教科らしさを生かした主体的・対話的で深い学びを試みる、そして、⑤学外の関係諸機関や専門家や地域住民なども積極的につながり、そのチカラを生かす、というものです。これらプロセスを教師同士が共創し、さらには教師と生徒がともに社会に開かれた探究的な学びを共創するところに特徴があります。

「論より証拠」をモットーにして、まだまだ試行実践の段階ではありませんが、学校現場の協力を得ながら挑戦し始めています。Co-Creative Learning Session (略称:「コクリ」と名づけた記念すべき第1弾のダイジェストは次ページの通りです。最も生活に身近な「食」をトピックにした共創する学びの一端をご覧ください。

1 食と聞いて思いつくことは？ ～食の世界への誘い～

「チェックイン・アイスブレイク」の後、「食と聞いて思いつくこと」のシンキングマップづくりから始まりました。自分と仲間の経験・知識を手掛かりに食の世界を広げ、皆でシェアした一行は食の世界の入り口に立ちます。

続くミッションは「ニュース・ショー」。新聞・ニュース等、食をめぐるホットなトピックをベースにリサーチワークを行い、グループごとにその成果を

「ニュース・ショー」としてプレゼンするのです。チョコからフェアトレード、フルーツから見える世界、野菜で学ぶ生物多様性、昆虫食ミドリムシから考える未来食、和食のヒミツ、フードロス。6つの「ニュース・ショー」に生徒も教師も夢中になり、食世界へのモチベーションは一気にドライブされました。

3 大好きなパスタは科学的に解明できるか ～地域の農家をみんな幸せにする方法～

今回は科学の立場から食の世界に接近。専門家の藤田真理子先生（北海道大谷室蘭高校）のセッションは「ちりめんモンスターをさがせ!!」のワークからスタート。自分たちが決めた基準にしたがって、ちりめんモンスターをピンセットで分類する活動に熱中する生徒たち。

カテゴリー化の手法を学んだ生徒たちの次なる挑戦は、大好きな料理を科学的にアプローチすること。グループごとに料理を決め、タブレットを用いながらリサーチしたものを他のグループにプレゼンします。食べ物の向こうに見えるものを科学的に探究する楽しさを物語るプレゼンが続きました。

5 千尋の両親はなぜ豚になったのか？ ～ジブリアニメ「千と千尋の神隠し」より～

中世古典文学の専門家である中野貴文先生のサブカルを駆使したレクチャーに生徒は巻き込まれ夢中になっていきます。土地のものを食べるということは古典においてどう描かれてきたのか、そこをスタートに、ジブリアニメと中世文学のつながりにリンクする

プログラムに生徒たちから歓声があがりました。「アニメ・古典・食が見事にドッキングしてワクワクしました」そう語る生徒たちは、食の世界と古典のつながりだけでなく、世界の文学における食とのリンクについても考え始めたのです。

7 食の世界はどこまでひろがる？～プロジェクト成果発表～

専門家のセッションを通じて、そして、毎日の生活の中で見つけた「問い」をもとに、生徒たちの学びの探究・共創プロジェクトがスタートします。プロジェクトの作り方・進め方のアドバイス・個別ミーティング・リハーサルを終え、いよいよ成果発表会。ラインナップをご紹介します（右図のリスト）。「食」と聞いて思いつくもの、そこからスタートした知の冒険。農業・科学・文学・貿易・加工食品それぞれのマスター（専門家）と共に旅したコクリワールドの中で、生徒たちはつづやきます。「楽しい」「おもしろい」「深い」と。この生徒たちの言葉は、「ポップでディープなコクリ旅」を目指した私たちにとって大きな喜びであり、同時に次のコクリ冒険をドライブする大きな力となったのです。ワクワク・ドキドキの学びを目指す「コクリプロジェクト」これからも続きます。第二弾「衣プロジェクト」すでに始動中です。

2 どこでどんな農作物を作るといいのか？ ～地域の農家をみんな幸せにする方法～

第2回目は地理学の立場から食と農業の関係に迫るのがねらいです。専門家としておいでくださった生田清人先生（ICU・駒沢大学・聖心女子大・海陽中等教育学校非常勤講師・元開成高校教諭）のレクチャーは都市からの距離によって最適な生産物が決まるという「チューネンの農業立地論」から始まりました。アメリカの農業分布を手がかりとするワークを通し

て、見事にその理論があてはまることを発見。日本の場合はどうなのかなど、生徒たちの探究が続きます。

食料生産と流通の仕組み、そして社会状況とのリンクなど、地理学ならではの地図から読み解くアプローチを通じて農業を学んだ生徒たちのまなざしは大きく変容していきました。

4 いい貿易って何だろう？ ～コーヒーカップの向こう側～

専門家としていらした開発教育協会の伊藤容子さんが、ロールプレイを通してコーヒーの生産過程・価格決定のプロセスを考えるワークを行ってくださいました。生産者になってみることで、コーヒーカップの向こうに見える世界を深く考え始めた生徒は次のように語りました。

「生産地の人々が本当の意味で自立するために、私は何ができるのだろうか？考えたいです」「開発途上国の生産物価格の決定についてもっと知りたいです」

見えるものの向こうにある見えない世界に生徒の思いは広がります。

6 加工食品はどのようにしてつくられるか？ ～企業努力の現場～

ニチレイフーズの方から学ぶ「出張工場見学」。リアル動画やパワポを使って冷凍食品ができるまでのプロセスを学ぶ生徒たち。教室にいながら、実際の工場見学でも見られない製造工程の映像をみたり、冷凍食品クイズに挑戦した生徒たちは「冷凍食品への

愛を感じました」「冷凍食品を上手に使って毎日の食生活を豊かで楽しいものにする工夫をしたい」と語ります。最後に行った五味識別テストで、味覚を鍛えることの大切さを始めて感じたという生徒たちは毎日の食に対する考え方を大きく揺さぶられたと言います。

- | | |
|---|---|
| 1 | チョコどうまくつきあう方法 ～チョコの向こうに見えるもの～ |
| 2 | おいしい日本茶を召し上げろ ～フレーバー日本茶への挑戦～ |
| 3 | えっ、こんなに捨てられているの？
～フードロス・フードウェストを知ってますか？～ |
| 4 | その非常食、もっと、おいしくなりますよ
～サバイバル生活でもideaが勝負～ |
| 5 | 宇宙食、作って、食べてみた ～宇宙食は無限にひろがる～ |
| 6 | 未来食はコートピア or ディストピア？ ～人にとって食事とは～ |
| 7 | 教員チームエグジビジョン：江戸東京野菜を知っていますか？
～種はタイムカプセル～ |

3. 試行実践を通じて

「なぜ?どうして?」「おもしろい!」という感覚を大切にしながら挑戦し続けた半年間の軌跡をご覧いただきました。今回はアフタースクールプログラムとして教師・生徒ともに有志を募り、約30名の仲間たちと学びの冒険をともにしました。同じ学校に通う中学2年生と3年生、高校2年生が集い、学年の壁をこえて、お互いに刺激を与えあう姿がそこにはありました。

各専門家のセッションは毎回50分×3コマで構成され、パワフルな問いが次々と生徒たちに投げかけられます。生徒たちにとつての当たり前は揺さぶられ、自分たちの当たり前は当たり前ではないということに気づき始めます。新たな知識を獲得し、新たなものの見方や考え方で物事を捉え直せば違った世界が見えてくるのが徐々に分かってくるのです。そして、各専門家によるセッションで得た気づきを手がかりに、生徒たちは自分たちのプロジェクトを立ち上げます。生徒たちには日々の生活からハテナを生み出す「ハテナノート」に挑戦し続けてもらいました。自分たちが見出したハテナからどんなプロジェクトを組み立てるの

か、そのプロセスは真剣勝負です。「そこに愛はあるのか?」「誰に届けたいのか?」私たちとのやりとりを通じてたどり着いた最後のプレゼンテーション。保護者もお招きした舞台上で最善を尽くす生徒たち。やり終えた生徒たちの表情には達成感が満ち溢れていました。

もちろん全てがうまくいったわけではありませんが、「食と自分の生活との関わりはすごい」「1つの物事に対して視点を変えることでより深く1つの物事を理解できるのだと思いました」「色々な物事の裏側にも視点をあてたいと思った」「生きるために必要だから食べるという自分の考えが、食べることで自分自身の可能性を広げるという考えに変わった」「いつもの授業だと座って黒板を写しか行つておらず、つまらない、退屈、眠いという感情が好奇心より上回ってしまいましたが、今回のセッションは楽しく、自分のやりたい事を全力で調べつくす。一つの事を全力でやりぬく大変さ、楽しさが分かりました」という生徒たちの言葉に試行実践の成果と価値が凝縮されている、私たちはそう確信しました。

4. 共創する学びをぜひ一緒に!

中等教育を再考しようとするとき、次の問いに真正面から向き合うべきだと私たちは考えています。それは「もし定期テストや受験がなかったら、生徒たちはどこまで学ぶのか? 私たちは学びの内実でもって生徒たちを惹きつけているだろうか? そもそも学びを、そして、自分たちの成長を生徒たちは楽しんでいるか?」というものです。私たちはその問いを「自分たちの生活に身近なトピックを真ん中に置き、各教科

習を結びつけるとともに、学校内外の様々な専門家や地域住民らとつながりながら、仲間と知恵を出し合つてクリエイティブかつプレイフルに探究する、そうした共創する学びに挑戦すれば、どんな魅力的な経験が生み出されるだろうか?」という問いに発展的に置き換え、挑戦を始めています。

実際に、私たちの足元にある生活をしっかりと見つめ直せば、すでにグローバル社会が埋め込まれています。これまで継承されてきた歴史や文化はもちろん、新旧の科学技術などもまた埋め込まれています。そこに気づけていないだけです。自分たちの生活に身近なトピックを真ん中に置

き、それぞれの専門分野から多角的・多面的にアプローチするからこそ、いわゆる「各教科に固有なものの方や考え方」も実感しやすく、より深く厚みのある認識に至ることができます。生活経験にもとづく当たり前を疑い、専門家になりきって学ぶ、そして、いまだここにはないものを仲間とともに探究することで、生徒たちは自分の興味・関心を拡張し、社会との関わりにおいて学びを自分事として深く受けとめることができようになるのです。

奇しくもOECDが教育の将来ビジョンとして提案した「OECD Education 2030」でも、少数のトピックを取り上げ、現実世界との関わりをもちながら学際的・探究的・協同的に深く学べるようにする、というカリキュラム・デザインの原則が示されています。国際的な動向との偶然の一致に驚きさえ覚えています。既存のやり方を疑い、創意工夫すれば、現状においても学校現場から草の根的にオープンイノベーションを引き起こすことは可能です。これからの時代にふさわしい共創する学びのあり方とつくり方を探求する私たちの挑戦は続きます。目指すは日本から世界への発信です。

STEM教育とは？

その潮流から可能性を探る

1. 世界的なSTEM教育ブーム

— その特徴と使命

科学技術の高度化に伴い電化製品をはじめ多くの先進技術がプラットフォーム化され、仕組みが分かりにくくなっています。「科学は難しい」「専門家だけ分かっていればいい」という考えが広がる傾向は今に始まったことではありません。『ろうそくの科学』の著者マイケル・フアラデー (1791 - 1867) が市民に向けて分かりやすい科学を発信することに努めたのは、科学と日常生活とが切り離されていることを憂えたからであり、これがサイエンスコミュニケーションの起源と言えます。しかし、学校教育において理科と数学が日常の生活から乖離しがちなことは長年の課題となっています。

STEM教育は、2000年頃から米国の産業界で技術者不足が懸念される中、科学と数学などを有機的に結びつけるために使

われ始めた言葉で、Science (科

学)、Technology (科学技術)、

Engineering (工学)、Mathematics

(数学) を教科横断的に関連させる

教育です。この教育は、ヨーロッパや

オーストラリア、インドにいち早く広

がり、アジア各国でも注目されてい

ます。我が国においては、学習指導

要領改訂の方向性を示した2016

年中央教育審議会答申で、「算数

や理科については、科学、数学と技

術分野を総合的に重視するSTEM

(Science, Technology, Engineering

and Mathematics) 教育の視点を

踏まえ、例えば、理科において電気

の性質や働きを利用した道具があ

ることを捉える学習等を行う際、ま

た、算数において多角形などの図の

作成等を行う際に、プログラミング

を体験しながら、プログラミング的

思考の良さに気付く学びを取り入

れていくこと等が考えられる。」と

示されました。また、「小学校プロ

gramming教育の手引(第一版)「

(文部科学省、2018)では、算

数、理科の他、音楽ソフトを用いた

作曲など多くの例が示されました。

2020年度から小学校教育にプ

ログラミングが入ることが話題にな

り、STEM教育を行う民間の教室

が人気を博しています。プログラミ

ングやロボット作りの人気は、世界

的にブームとなっているSTEM教育

の潮流を受けたものと言えます。

私は、2018年7月4日に出版

された米国の本の日本語訳『子供の

科学STEM体験ブック 実験でわ

かる科学のなぜ? AI時代を生きぬく

理系脳が育つ』の日本語訳監修者の

一人として出版に携わりました。こ

の本は、我が国の小・中学生が習わ

ない、日常生活に直結する工学的な

視点が盛りだくさんで、大いに刺激

を受けました。グローバル化に合わ

せ、世界の教育の動向を知っておく

ことは今後益々重要さを増してい

ます。

STEM教育の主な特徴の1つは、

学習にEngineering (工学) の要素

を組み込んでいる点です。例えば、

モーターで走る車を作る時に、回転

が速いモーターでゆっくり走る車

を作るとすると、工学的に設計をする

が必要が出てきます。方法は1通りで

はありません。これまでは、専門家

が築いてきた科学を辿ることを中心

とした理科教育が多かったのですが、

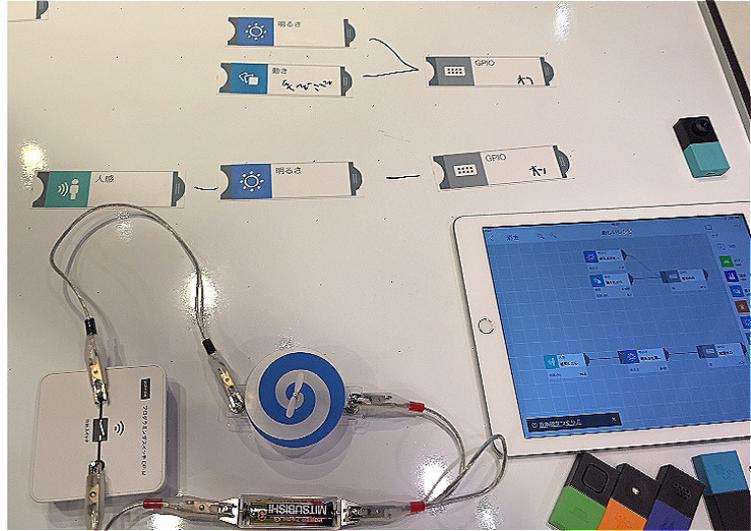
Engineering (工学) が入ることで、

複数の答えが提案され得る授業デ

ザインが広がっていくことによつ



『子供の科学 STEM 体験ブック 実験でわかる科学のなぜ? AI 時代を生きぬく理系脳が育つ』(コリン・スチュアート著、誠文堂新光社)



そうなる、先生の役割は、正解を教えるのではなく、様々なプロセスを道案内するガイド役へと変わっていくことも、副次的な特徴と言えます。

もう一つは、コンピュータを用いた技術を介らせていく点です。例えば、右の写真のように、温度が高くなると扇風機が回るけれど部屋から人が出ていくと扇風機が止まるといったプログラムを考えた人が、実際にその模型を回路でつなぎ、タブレットで操作することができる教材^(*)が手に入るようになりました。

このように、STEM教育は、日常生活と結びついた知の体系づくりを目指すところに教育的な意義があります。学習者が学びの意味を理解し、学んだことと自分とのつながりを実感することによって記憶が強化され、深い学びが実現すると考えられるからです。

2. 我が国の教育の良さを見つめて

我が国の人々が自然の素材を生かし巧みな技術によって優れた民藝品を作ってきたことを世に知らしめた柳宗悦(1889 - 1961)は、仕事の尊さを解きました。我が国の先人は素材の特性に耳を傾けて心をつぎ込み製品に命を宿そうとしてきました。このような製品に対する姿勢が後の電化製品の開発や自動車産業へとつながっていったと言えるでしょう。教育においても、「ものづくり」は子どもたちの心を掻き立て知性を働かせ、創造力を養ったりコミュニケーション力を高めたりするよう活用すべきでしょう。近年、オーストラリアを中心にSTEMにA(ART)を加えてSTEAMと称する場合が増えています。ARTは芸術と訳されがちですが、実は多くの意味を含んでいます。分かりやすいの

は絵、音楽、映像にすることですが、他にも言葉を使ったコミュニケーションや、説得力のある文を書くこと、創造力を働かせることもARTに含まれます。そう考えると、我が国の小学校教育において、国語、音楽や図画工作、理科の「ものづくり」をバランスよく行ってきたことは、効果的だったと考えることができ

ます。

学習指導要領改訂によって平成31年度から先行実施が認められる高校では、教科「理数」が新設されます。生徒が数学を使って理科的な問題に挑み、自らの課題意識を持つて探究する場面が増えること大いに期待したいところです。

ものを発見しようとする雰囲気があったと言えます。

近年の技術革新により、教育界は大きな転換期を迎えています。経験が豊富な先生方にとってもICT機器の活用やプログラミング教育は未知の領域であり、若手教員の方が造詣が深い場合もあり得るわけです。そのような中、子どもの興味を

引き出す授業を構成することに長けたベテラン教員と新しい機器を使用することが得意な若手教員とが闊達に議論できる雰囲気づくりこそが教育をよくしていく原動力になることでしょう。また、STEMを一つの核として小学校、中学校、高等学校、大学、研究機関や地域が

つながることができるかもしれませ

ん。STEMのことがよくわからないからつながられる、STEMにはそんな活用方法もあるのではないだろうか。これから我が国でどのようにSTEM教育が広がり、STEMによって学校教育がどのようにデザインされていくか楽しみです。

3. STEM教育の活用法

コペンハーゲン精神という言葉があります。これはニールス・ボーアのもと量子力学を研究し、後にノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹を支えた研究所の精神です。当時、突如広がった新しい学問である量子力学の領域では、それまでの常識的な考えが通用せず新しい理論の構築が待たれていました。そこでは先輩も後輩もなく、互いを尊重し議論を重ねていくことによって新しい

【註】
* 詳しいは <http://meshpi.com/jp/>

【参考文献】

- ・ 中央教育審議会答申(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- ・ 文部科学省(2016)「小学校プログラミング教育の手引(第一版)」

センス・オブ・ワンダーを研ぎ澄まそう！

— 科学の目と科学のこころを育む学びのあり方の探究 —

『センス・オブ・ワンダー（＝自然の神秘や不思議に目を見張る感性）』とは、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校（以下、昭和女子中高）の理科教育がずっと大切にしてきた言葉です。感性を高めるにはまず本物に触れることが重要であると考え、毎年行われる学寮研修（同校の所有する宿泊施設で行われる、4泊5日の宿泊研修）での山や海の自然を利用した体験学習を始め、日々の授業でも、実物に触れる体験をふんだんに提供しています。

また、中高一貫校ならではの体系的な学習で、多面的に思考力を育てる協同学習、実験・研究、発表を多く取り入れています。

昭和女子中高では、2016年から中高一貫カリキュラム「SHOW A NEXT」がスタートしました。同校の伝統である全人教育を土台として、多様性のある社会で自分のよさを発揮し、チャレンジ精神をもって、世のため人のために尽くせる人間の育成を目指しています。

本カリキュラムでは、生徒ひとり一人が自分の得意なことを磨き、自分の可能性に挑戦できるよう、「本科コース」「グローバル留学コース」「スーパーサイエンスコース」の3つのコースが設定されています。

このうち、スーパーサイエンスコースは中3から始まる理数系進路に特化したコースで、「理数領域に興味がある」「理数系の進路をめざす」生徒のためのコースです。

冒頭のセンス・オブ・ワンダーという言葉は、生物学者であったレイチェル・カーソン(1907-1964)が使い、有名になりました。アメリカ出身の女性学者ですが、農業で利用されている化学物質の危険性を取り上げた『沈黙の春』を執筆した作家としてご存知の方も多いかと思えます。彼女はアメリカでも最も早く環境問題に警鐘を鳴らした生物学者でした。彼女こそが「環境への権利」という概念を根付かせた先駆者であり、当時は極めて稀であった「女性が科学者になる道筋」を作った人物です。

スーパーサイエンスコースでは、そんなレイチェル・カーソンをロールモデルとして①地球規模で物事を考える、②他人を常に優先する、③データに基づく科学的な思考・判断ができる、④最後まで粘り強く自分の意思を貫く、⑤社会に貢献できる女性になる、という5つの育成目標を

きっかけ、「科学の目と科学のこころ」を育む学びにチャレンジしています。その一環として、フィールドワーク研修である『屋久島研修』、米国科学教育プログラムを取り入れた『S理科演習』、物理・化学・生物・地学・数学の5分野それぞれの連携大学から招いた講師による『大連携理数プログラム』などの独自プログラムに取り組んでいます。

また、文部科学省国立教育政策研究所の研究指定校として委嘱を受け、一期生を対象に『中高一貫校における探究的な学び（理数探究）の資質・能力の継続的育成』を研究課題として、STEAM教育の要素を取り入れながら、理科、数

学、情報（技術家庭）等の教科横断型カリキュラム・デザインにも挑戦中です。

第二のレイチェル・カーソンが誕生する、その日を夢見て、教育界に新風を巻き起こしていきたいと思えます。乞うご期待です。





「家庭教育」って何だろう？

はじめに 新米パパの思い

「私には三歳と一歳の二人の子どもがいる。共働きであるが、私の方が時間の融通がきくので、保育園の送り迎えや集団検診、予防接種等は私の方が行くことが多い。保育園は毎日のことなので父親が行っても何でもないが、それ以外の場面だと結構おもしろい体験をすることが多い。」

これは、『おんなの叛逆』というミニ「ミ」誌に掲載された私の文章の冒頭です。1996年2月刊行で、原稿を書いたのは95年の秋頃になります。1992年2月生まれの娘と93年12月生まれの息子との生活の一端を書いたものです。検診や病院、保育園で言われたこと、経験したことを書いた小文ですが、最後は次のようにまとめました。

「夫婦が二人とも働き、本当に子

育てを分担しようと思ったら、男の方も仕事を犠牲にする覚悟がなければやっていけない。私はもっと男が育児の日常的場面に登場することが必要であろうと思う。そうすれば、職場でも『育児責任を持っていて当たり前』という風潮ができるだろう。」

これを書いて20年以上経ちましたが、今でもそれほど違和感がないのではないかと思います。少子化社会対策、子育て支援、ワーク・ライフ・バランス……、言葉が踊るばかりで内実が伴っていないのではないのでしょうか。

「家庭教育」への違和感

ところで「家庭教育は教育の原点(出発点)」であると言われます。2006年に改定された教育基本法の第10条は保護者の責任と家庭教育のあり方(基本的生活習慣・自

立心・心身の調和の取れた発達)を定めています。

でも私は「家庭教育」という表現にずっと違和感を抱いてきました。家庭は教育の場なのでしょうか？

例えばあいさつをするのは、「基本的な生活習慣」を身につけさせるためなのでしょう？ 学校の出来事を聞くのは「信頼感」を育成するためののでしょうか？ 家族で旅行をするのは、「豊かな体験」をさせるためなのでしょう？ 人間同士の「コミュニケーション」としてあいさつをして、子どものことを知りたいから学校の出来事を聞き、家族で楽しみたいから旅行をする、というだけではないのでしょうか。

どっちにしても同じことだと考えられるかもしれませんが。しかし私は親が教育的な意図を持つかどうかで、子どもとの関わりに大きな違い

が生じると考えます。

客体か主体か

教育的な意図とは、子どもを客体(一定の方向に向けて形成されるべき素材)として見ることはないのでしょうか。学校の教師は教育的意図を持ち、それに基づいた指導を行います。親も(学校とは別の内容であるとしても)教育的意図を持つならば、子どもはいつも「導かれ、矯正される客体」としてしか存在できないことになります。家庭を学校の下請け(あるいは学校に先立つ教育の場)にすることが、子どもにとっ

て本当に良いことなのでしょうか。

私は自分の子どもたちを教育しようと思ったことはありません。自分が人を教育できるほどの存在でもないと感じており(これは大学でも同じですが)、とにかく一緒に楽

しく生活できればよいと考えてきました。子どもを自分と対等な主体として対することが何よりも大切だと思っています。

家族から

本文を書くにあたって子どもたちに「自分の受けてきた家庭教育」を書いてもらうよう頼んだところ、LINEで次のような文が届きました。

父は大学教授、母は中学校教員である私は、どんな英才教育を受けているのかと周りに思われたことは数え切れないほどだ。実際の我が家は父が家事をしており、母の口癖は「妻が家事をやって当たり前なんて有り得ない」である。小学生の頃、私はお風呂掃除をしていた。母は「これはお手伝いではなく、あなたの仕事だ、仕事をして初めてお金もらえるんだ」と言っていた。また、母は私と弟に「姉だから、弟だから、女だから、男だからというのは差別だ。あなたたちは一人の人間なんだ」と言っており、いつでも私と弟をひとりの人間として見ていた。だから私が決断したことを止めることはないし、逆に期待することもなかった。昔はテストで点数が良くて

も他の家では褒美があるのに我が家ではそれが無いことに不満を感じていたが、今となれば、自ら道を切り開き責任を持ってその道を進むというものが出来ている私の人生は、母の言葉と優しく見守る父の教育の賜物だろうと考えている。しかし最近還暦を迎えた母は独身の私に何か期待しているように見える。一つくらい期待に応えたいものだ。〔娘 26歳〕

私が受けた家庭教育としてまず始めに思いついたことが『勉強なさい』と言われたことがない点です。テスト前、受験期など多くの親はそれを子どもに言うと思いますが、我が家では両親に言われたことがありません。姉には常に言われていました。また、分からないことがある時には質問すると一緒に考えてくれたり調べるための辞書や参考書を示してくれたり、答えを導くための手法を教えてくださいました。どのようなことでも答えを出すまでの過程を自らで考えることで浅薄な知識ではなくしっかりとした土台の上に成り立つ知識として学ぶことができると思います。その大切さを教えてくれたのが『自分の受けた家庭教育』です。〔息子 24歳〕

最後に妻からの一言です。

未知なる我が子に会いたかったけれど「母」にはなりたくなかった。私の母世代の多くは我慢強く、それを喜びとしているように見えた。しかし私には我慢が美德とは到底思えなかった。「我慢とは何なのか」と悶々と問い続け自分なりの結論に至った。

①我慢は我慢を再生産する ②我慢は問題を潜在化させる ③我慢は

一部の人にだけ強いられる、だから我慢は美德などではない、と。私は、性別・立場別役割分業を放棄することにした。「性別や立場を越えて個として生きたい」。人生は一度きり、自分で創り上げるしかない。個として自立し、個として互いを尊重する生き方を貫きたかった。自分も家族に対しても。その結果、今日に至っている。





宿題は「残業」なのではないか？

1. 当たり前すぎる存在

私たちにとって学校の宿題は当たり前すぎる存在です。宿題を課されて喜ぶ子どもはそう多くありません。宿題とは「忌まわしき記憶」であり、「避けがたい壁」であり続けてきたと言えば言い過ぎでしょうか？

やってきて当然、やってこななければ叱られる。宿題という言葉から想起されるのは、大抵の場合、ネガティブな感情でありイメージです。それほどまでに影響力のある宿題のあり方は、思いのほか論じられてこなかった気がします。

2. そもそも宿題とは？

宿題とは何か、教育学関係の代表的な事典で調べてみました。例えば「学習の定着や次の学習の準備に向けて、教師が子どもに示した家庭での学習や作業の課題」（岩

下, 2002）を指すようです。英語だと homework や assignment と言うように、海外でも宿題は課されている場合が多く、その賛否をめぐって歴史的に論争が繰り広げられてきました（Gill & Steven, 2004 Ⅱ訳 2016）。

ちなみに、宿題に関する法的な根拠は基本的にはありません。各学校・教師による学習指導の一環として、あくまでも慣例的に現場判断で行われてきました。そのため、宿題を課すことのねらいをはじめ、その内容・方法などは多種多様であり、十把一絡げで論じることができない難しさに伴います。「教師の数だけ宿題がある」と言われるくらいです。

3. 宿題の大義名分

もちろん、慣例的に長きにわたって宿題が課されてきた事実のもつ重みは無視できません。賛成論者の代

表的な考えには、基礎学力や各種スキルの定着、知識・理解の深化、学習習慣の確立、学校教育と家庭教育のパートナーシップ構築などの効用が挙げられます。実際にこれまで一定の成果を残してきたことは確かです。

では近年の文脈で捉えてみましょう。平成20年版学習指導要領の改訂（高等学校は平成21年）において、総則に「家庭との連携を図りながら、児童生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならぬ」という文言が追記されました。全国学力・学習状況調査の学校質問紙でも、「保護者に対して児童生徒の家庭学習を促すような働きかけを行いましたか」「家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか」「家庭学習の課題（宿題）を与えましたか」「児童生徒に与えた家庭学習の課題について、評価・指導しましたか」などの項目が多数含まれています。

つまり、宿題は学びから逃走する子どもたちを引き留める装置として、家庭をも巻き込んだ学力向上方策の一つとして期待され、注目を集めているのです。保護者の立場からすれば、「家庭の負担が増えすぎるのは困る」と思いつつ、「宿題がないと家で勉強しないから出してほしい」と思うのが一般的なのかもしれません。

4. 宿題の悲しき現代的帰結

実際に、ベネッセ教育総合研究所が2016年に取りまとめた「第6回学習指導基本調査」の結果を見ると、小学校の場合、1日あたりの宿題の時間は2002年以降長くなっており、中学校でも宿題を「授業のたびに出す」ことが増え、「ほとんど出さない」が減少しています。

また、宿題の内容を見ると、小学校では「計算や漢字などの反復的な練習」「音読」が圧倒的に多く、中学校は「学校指定の副教材、問題集」「定期試験対策になる内容」「授業でやり残した作業や課題」が Top3 を占めます。他方、小学校・中学校のいずれの学校種においても、「調べ学習」や「作文やレポート」が宿題に課されることは少ない傾向にあります。

この調査結果と関連する由々しき事態が起っています。夏休みの宿題をめぐる問題です。昔からそうかもしれませんが、子どもの多くが自由研究や読書感想文に苦戦しているようです。そのためあつてか、近年、フリマアプリやオークションサーブिसにおいて、完成済みの読書感想文や自由研究などが多数取り引きされてきたことが判明しました。事態を重く見た文部科学省は関連産業に働きかけ、その合意内容を「宿題代行への対応について」(2018年8月29日付)という文書で公表したのです。

子どもの主体性が最も発揮しうる宿題であるはずの自由研究や読書感想文が「売買」される時代です。なぜそれほどまでに苦戦するののか？

日々の授業やそれと関連する宿題において、子どもの主体的で探究的な学びを支える力量をしっかりと育てているのか、改めて問い直す必要があります。

5. 宿題は残業なのでは？

ここで子どもの側に立って考えてみましょう。子どもは必ずしも好き好んで学校に通うわけではありません。学校で学ぶこともまた、必ずしもやりたいことは限りません。所与のものとして定められた計画に従い、「課業」として学んでいるというのも一つの現実です。大人の世界で言うところの「労働」と同じです。大人の場合、基本的な労働時間が定められており、それを超過すれば時間外労働として「残業」扱いになります。それが度を超すと「ブラック労働」という社会問題に行き着くのは周知の事実です。

学校教育もまた「標準授業時数」が定められているわけであつて、基本的にはその時間内で完結する教育を提供する責務を各学校・教師は負うべきなのではないでしょうか？宿題は「残業」だという見方ができます。学校と家庭の連携・協働と言うと聞こえはいいですが、時間外学

習としての家庭学習に頼らざるを得ない状況を、あえて教育のプロであるはずの教師がつくり出すのはどうも腑に落ちません。そもそも「残業」を命じ続けることで学習習慣の確立や基礎学力の定着などを図ろうとすること自体に違和感を覚えます。度が過ぎれば「ブラック勉強」を生み出しかねません。家庭には個々の家庭の事情があり、家庭教育の自由もまた認められているのです。

6. せめて…

たかが宿題、されど宿題です。今次の学習指導要領改訂において、学習指導要領を「学びの地図」として、教育関係者間をはじめ、家庭や地域、社会の関係者と幅広く共有・活用することが提案されています。学校を中心とする公教育に足並みを揃えようとするのが最善なのではないでしょうか？公教育と私教育はやはり異なる性質をもつ営みであり、重複する部分はあっても区別されるべきものです。「残業としての宿題」という見方・考え方は、その風潮に警鐘を鳴らしてくれます。

百歩譲つて、もし「社会に開かれた教育課程」という理念のもと「主体的・対話的で深い学び」の実現を

目指そうとする今次の学習指導要領改訂の文脈に即して考えるのであれば、その成否を見極める試金石は、これまで夏休みの宿題として課されてきた自由研究への取り組み姿勢やその成果になるでしょう。日々の授業を通じて、どれだけ子どもの知的好奇心を駆り立て、子ども自身が新たな問いを生み出すきっかけを与えられているか、そして、その問いを自らが探究し、思考・判断・表現できるだけの力量を育てあげられているのか、が問われるからです。そのとき、宿題のあり方は大きく様変わりしているはずです。

【参考文献】

- ・ベネッセ教育総合研究所 (2016) 『第9回学習指導基本調査 DATA BOOK (小学校・中学校版)』
- ・Gill, Brian P., and Steven L. Schlossman. 2004. "Homework." *Paula S. Fess ed. Encyclopedia Children and Childhood: In History and Society*. Gale, Cengage Learning. // 北本正章監訳 (2016) 『世界子ども学大事典』、原書房、pp.572-573
- ・若下修 (2002) 「宿題」、安彦忠彦他(編) 『新版現代学校教育大事典』、きょうせい、pp.560-561



「目を凝らし、耳を澄ませます」

「変わらなきゃ！ わかっているんだけど、どうしていいのかわからない」「生徒とのコミュニケーションが難しい」切羽詰まった顔で、「で、どうすればいいんですか!!」と聞きにいらっしやる先生方のなんと多いことか。

そこで、まず三十数年前の私の体験からお話しましょう。はじめて担任を持った時、私は思いました。「生徒をしっかりと見つけ、困ったときサポートできる担任になろう。」ところが、現実には「どうにもならないこと」の連続。「思春期の生徒とのコミュニケーション」の中で私は毎日ヨタヨタ・ム・ム・ム・ムの連続でした。

Part1 「生徒の力はすごい」

〜生徒たちが教えてくれたこと〜

はじめてクラス担任を持つ私に教頭はおっしゃいました。「きみのクラ

スには中学で不登校だった生徒が二人います。二人とも中学3年時の欠席数は130越え、同時に成績は抜群、大学でカウンセリング専攻してたのなら大丈夫でしょう」と。さっそく二人のことを知ろうとリサーチを始めましたが情報はゼロ。入学式翌日、秋吉台への集団合宿の話をはじめると二人は露骨に不快な表情を

しました。「やばい」「ドキドキの私をよそに、級長二人が立ち上がり「先生、合宿最終日のキャンプファイヤー・スタンプツについて話し合いを

していいですか?」と「あつ、どうぞ……」と言いながらTとMを見ると二人は上の空、視線はそらつて窓の外。「Tちゃんダンス上手いよね」いきなりカナコにふられたTは「うん、まあ」とつい正直に反応。「Mは、話つくるの凄く上手いよね」Mグに言われたMも「上手くないけど、

キラリじゃないかも」とこれまた正直に反応。両者とも、あまりの不意打ちにいつものクール反応ができず、素直に応答。「よかったあ、Tさんがダンスで、Mさんが台本で」クラスの歓声とともに、あれよあれよで

クラスの働きはゼロ。ただただ啞然。「生徒って、すごいなー」と巻き込みぶりに仰天しながら、事の成り行きを傍観するばかり。こんなケースはまれですが、担任の私が動かずとも生徒同士の対話から、たくさんのラッキーが生まれるのです。集団合宿を契機に二人はクラスを中心メンバーとなり、秋の文化祭クラス映画でも大活躍。二人が何度か学校から遠ざかりそうな時期もありましたが、

その時の生徒たちの言葉がすごい。「私はTに学校に来て欲しい」「Tがないと私は淋しい」。この「私は

という言葉の威力、私は生徒達から学んだのです。二人は私にこう話しました。「中学の時、先生も親も心配してくれたけど、『あなたにとって……』のニュアンスで語られる言葉に

対しては『どうして私の気持ちかわかるのよ』って反発を感じたけれど、『私は……』って言われると善し悪しの判断は抜きにして、『あなたはそう思っているのね』と、素直に聞かせてしまうから不思議だった」と。かくして新米担任は生徒たちから学ぶという大きな武器を手に入れたのです。ほんとうに、生徒のことを知りたかったら、生徒の言葉に耳を傾けよう、生徒の表情に目を凝らそう。」と。

Part2 自分のカラダを

「いざいざ」に気づく瞬間

担任を何度か経験するうちに、生徒との関わりが少しずつ変わってゆ

く自分に気づきはじめて私。種種雑多な仕事に追いまくられ、せわしない生活が要求する「テキパキと素早く」のリズムが、最初のころの生徒と一緒に、楽な気分では雑談をかわす「ぼんやり」「とりこめのない」つき合いを楽しむ心の余裕を失わせていたのです。知らず知らず、生徒を見る時、表面にあらわれた彼ら彼女らの行動のみに目がむき、生徒一人一人の独特な個性、味わい、面白さ、あるいは、心の底に抱える涙や行き詰まりをしみじみ感じとるふれあいが減っていたのです。夜間徘徊、家出を繰り返す生徒に「もっと早く相談してくればよかったのに……」と言った時、生徒はこう言いました「先生いつも忙しそうだから心配かけては悪いなと思って……」

と。私は自分がダメな教師になっていると思えました。今当時の自分を振り返ったとき見えてくるもの。それは多忙で落ち着かない生活リズムと「生徒の心に耳を傾けること」とのギャップ、社会的ルールを教えるという役割に由来する「生徒を見る視点や接触の形式化狭窄化」、無意識裏に生徒を一定の方向に動かそうとする焦りに由来していました。いつのまにか、幻想としての「目標」

が大きな存在感を帯び、目前の生徒の心や気持ちに思いが向かなくなる、まさに主客転倒の事態に追い込まれていたのです。

Part3 一生懸命聴くこと

「わばり」からの脱出の模索は授業を通して生徒と共に学び合う関係作りから始まりました。学び合う関わりを作るため、聴き合う関わりを育てること。そのためには、まず、教師自身が生徒一人一人の声を丁寧に聴くこと。この基本的ともいえることに対して、自覚的でありたいと思ったのは、自分の授業のビデオ録画を見たときでした。公開授業であり、生徒も活発に発言し、あたかも学びの実践が展開されているように見え、後の検討会でも好評でしたが、私は強い衝撃をうけました。どこかで、上手い授業をしたと思っていたのでしよう。自分のシナリオにそつてプロデュースしようと、「いい発言」ばかりピックアップし、シナリオにはずれそうな発言や、実は核心に迫る可能性を秘めた物さえ、上手に対応しながら排除。生徒の思考を「いいもの」「よくないもの」に振りわけている私。他人に気づかれなくとも、私自身には、はつきりとそ

れが見えたのです。学びはテキストとの対話、他者との対話、そして自己との対話といいながら、私の授業は、生徒とじかの関わりを自らが絶つた自分勝手なものでした。それ以降、私は授業の中でも、クラスの活動の中でも、「聴くこと」を中心にしていたのです。

思春期の生徒と関わる時、いえ、それは思春期に限らず、人と関わる時の「コミュニケーションの基本」も、しれませんが、私は、こう思うのです。「生徒のこともっとわかりたいと思うのなら、目を凝らし、耳を澄ますことが大切だ」と。





探訪 學校

〔今回の学校〕

自由学園 女子部中等科・高等科 (東京都)

1921年、ジャーナリストであった羽仁もと子・吉一夫妻によって創立される。創立当初は女学校（現在の女子部中等科・高等科）のみだったが、その後、4歳から22歳までの一貫教育を行う学校へと発展を遂げる。「真の自由人を育てる」という目的を実現するために、「生活即教育」という理念のもと、独自の学びを継承・進化させ続けている。

日本で最初の女性記者であり、『家庭之友』（のち『婦人之友』）を創刊した人物として知られる羽仁もと子が、夫の吉一とともに創立したのが自由学園です。衣食住の合理化や家族関係の民主化などを主張し、家庭生活の実際の改良を提唱していた羽仁もと子の自由学園における教育実践は、よりよい生活のあり方とつくり方を徹底的に探求するものでした。その理念と実践は、教育史上、大正新教育の系譜に位置づきます。今号では、「生活にこだわる」ことの価値と可能性を中心に、そのユニークさの一端を紐解きます。

1. 「真の自由人を育てる」ための教育を求めて

自由学園が掲げる教育目的は「真の自由人を育てる」であり、そのために「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」学びが重要視されています。すなわち、人間教育を通して、思想においては自由を、生活においては協力を、祈りにおいては愛を追い求め、よく生きることでよりよい未来をつくること目指されています。そして、それらは自分たちの生活においてこそ体现される必要があるとされ、「よく教育することはよく生活させること」という「生活即教育」の理念に立脚した学校づくりがこれまで模索されてきました。

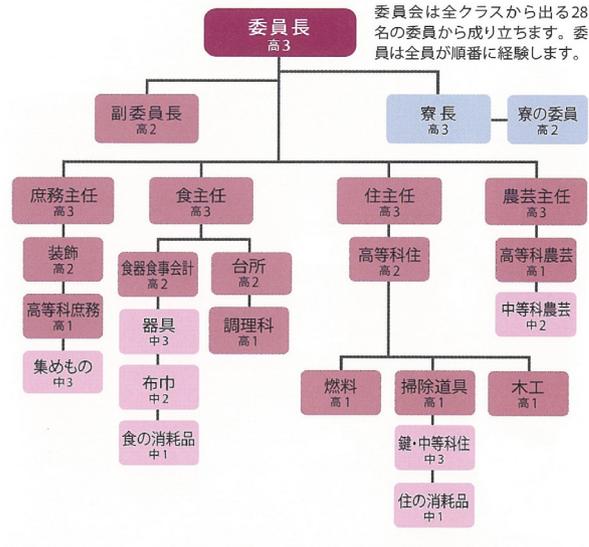
羽仁もと子は、自分自身の学校体験や長女の小学校での経験を通して、教科書に書かれたことをひたすら暗記させ、知識を多く覚えることに名誉心や競争心を植えつける「詰め込み教育」に不満を覚えていました。他方で、子どもの個性を無批判に肯定し、わがままを黙認する恐れのある「子

ども中心主義の教育」にも批判的な考えをもっていました。彼女は自由学園の教育において、子ども自身の要求に基づきながらも、他者と協同しながら進歩することを求め、神の意志にかなう真の自由人を育てようとする、キリスト教の精神に基づく自由主義教育の立場を堅持していました。

自己中心的で自分勝手な自由に陥らないために、神という超越的な存在との関係で自己を捉え見つめ直す「宗教心・宗教性」の必要性を強く自覚していた背景には、もと子・吉一夫妻が敬虔なクリスチャンであったことが挙げられます。ただし、一般的なミッションスクールとは異なり、キリスト教「を」教えることには慎重であり続けてきました。実際に、今でも特定の宗派に属することとはなく、聖職者が学校に籍を置き説法することはありません。宗教それ自体が社会的に利用されることを自覚していたもと子は「宗教の詰込みは実に恐ろしいこと」であると考えていたわけです。自由学園の本質はキリスト教の精神を「手がかり」にしながら、「何が正しい権威か、何が使命であるか」を自らの頭で主体的・批判的に考え、責任をもって自らの言動を選択することで、よりよい生活と社会の実現に向けて努力し続ける人間を育成しようとするところにあるといえます。

2. 生活即教育の基盤としての「自発自治」

自由学園は少人数制を採用しており、1学年1クラスで編成されています。そのよさを活かし、学校全体がまるで「大きな家族」のようなまとまりとつながりを持ち、生徒たちの手作りによる「自



「労自治」の生活が営まれているところに大きな特徴があります。その核となるのが「委員会」制度です。

自労自治の生活は、各学年より約60日交替で順番に任命される「委員会」が中心になって運営されます。委員長と寮長は高3から、副委員長は高2から全校生徒の選挙によって信任されます。該当学年全員が候補者であり、日頃の行ないや働きをもとに全校生徒各自の一票によって信任され、約50日の任期を終えると次の新たな役職者が信任されます。また、委員会は全クラスから出る26〜27名の委員からなり、何らかの委員を全生徒が順番に経験することになります。生徒たちは学年に任せられた仕事をいかにやり遂げるか、どのようにして責任を果たすのかを常に考え、責任をもった行動を選択することが求められます。

どの学年であっても自らのリーダーシップやフォロワーシップ、パートナーシップが試される機会が、

ふんだんに、かつ、平等に用意されているわけです。この委員会が中心となって担う仕事は非常に多岐にわたります。「庶務」は健康管理、装飾、来客対応、「食」は台所、食器、燃料などの管理、「住」は掃除用具、机・椅子、校舎の鍵などの管理、「農芸」は農具や畑、落ち葉の管理などを主に担当します。その他にも、団体登山などの学校行事をはじめ、日々の全校集会・クラス活動なども生徒たちの手によって運営されます。「生徒たちができることは生徒たちに任せる、ただし、相応の責任は求める」という自労自治の原則が貫徹されており、学校生活の実質的な運営は生徒たちがほとんど担っているといっても過言ではありません。学校は授業を受ける場である前に他者とともに生活する場であるという思想が通底しており、よりよい生活の場をつくるための努力と知恵が、先輩から後輩に脈々と引き継がれています。

3. 社会に開かれた「生活即教育」へ

自由学園に足を踏み入れると、本当に都内なのかと驚くほど自然豊かな光景がひろがります。各学年には畑が用意され、様々な農作物や花木を栽培しています。日々の労作を通じて収穫したものは昼食や学校行事で利用されることもあるようです。また、建築物も歴史的な情緒を色濃く残しており、教室をはじめ、机や椅子、各種道具類は手入れと修繕によって大事に使われ続けます。いずれも生徒たちの自労自治によって維持・管理されており、キャンパスそのものが豊かな教材として生徒たちの感性を刺激しています。

ここでは、そうしたキャンパスにおいて営まれてきた自由学園らしい生活即教育のうち、女子部に代表的な実践を紹介しておきます。

(1) 「食の学びの循環」

まずは「食の学びの循環」です。「発育盛りの子どもたちに温かい食事を食べさせたい」という創立者の意向から、女子部では各クラスが持ち回りで毎日の昼食約300人分をつくり、食堂に全生徒と教職員が一堂に会していただくという伝統がしっかりと根づいています。今ではそれが発展し「育てる（畑で作物を育てる）↓整える（自分たちで食事を作る・食卓を整える）↓いただく（自分・仲間が作った食事をいただく）↓片づける（自分たちで最後まで責任を持つ）」という一連の学びの循環が構築されるまでに至っています。

そこでの学びは「調理の仕方」だけに留まりません。例えば、大勢の昼食を合理的かつ効果的に準備し片づけるための「汎用的なマネジメントスキル」（時間を管理する力、状況を判断する力、組織を動かす力など）が試されます。あわせて、食と農に関連づけられた「教科横断的な学び」（栽培・生産、産地、栄養素、栄養価や材料費の計算など）も深められています。また、畑での日々の労作を通じて得られる気づきを含め、「食べることは生きること」を生活に即して学び、心を耕す機会にもなっています。消費者としてただ出されたものを食べているだけの生活では学ぶことができない「食事の向こう側にある過程や背景」を実践的に学ぶ仕組みがそこにはあります。

(2)「木の学び―80年使える机・椅子を考える―
もう一つの代表的な実践に「木の学び―80年使
える机・椅子を考える―」というプロジェクトが
あります。教室で使う机や椅子は古いものだと80
年経っており、老朽化が著しく、リニューアルする
計画が立ち上がりました。80年もの間、生徒た
ちが手入れや修繕を重ね、大事に使い続けてきた
だけでも驚きですが、そうしたリニューアルの契機
を生徒たちの学びにつなげようとするところに自
由学園らしさがあります。有志を募り、2012
年からプロジェクト活動が開始したのです。

活動は、これまでの机と椅子の歴史を調査する
ところから始まり、新たな歴史を紡ぐためのデザ
インへと展開していきます。特筆すべきは、机と
椅子の材木の出所に不安を感じ、次の80年女子
部で使っていく物がどこからきたどのような木材
なのかをはっきりした方がいいという考えに至り、
学びに幅と深さ、厚みをもたせたことです。様々
な専門家の協力を得ながら、生徒たちは輸入木
材の供給量の増加、外国産材と国産材との比較、
針葉樹材と広葉樹材の比較、広葉樹材をめぐる
国内の現状、海外における違法木材の現実や日
本への輸入など、リサーチに邁進します。

それらの結果をもとに「国産の広葉樹でつくる」
という方向性を決め、岐阜県の「ものづくりで森
づくりネットワーク」と連携して、「机と椅子の
更新によって、木材を利用することが森林環境に
どのような影響を与え、私たちの暮らしにどのよ
うに結びついているか」という問いを探究します。
そのプロセスを経て、新たな机や椅子が完成した

わけですが、そこで学びが完結するわけではあり
ません。「この取り組みを次のステップにどうつな
げていくか」を考え、専門家の助言を生かして、
机や椅子のために択伐した森林に自分たちの手で
苗木を育て返すという挑戦が始まります。「森林
に命を返す持続可能な循環サイクル」の実現に向
けた学びは、今後も後輩たちの手に引き継がれて
いくこととなります。

このプロジェクトは有志による一部の生徒の活
動ではありますが、その進捗状況や成果は学校全
体で共有され、多くの生徒がこのプロジェクトにつ
いて学べる機会が授業の中にも組み込まれたりし
ています。自分たちが使う／自分たちの後輩が使
い続ける机と椅子という自分たちの生活に即した
素材から、専門家の協力を得ながら教科横断的
に社会に開かれた学びを見事に展開している実践
の一つだといえることができます。

4. 取材後記

自由学園女子部での取材を終え、学校は生活
の場であるということ、そして、生活における自
立と協調なくして社会における自立と協調はな
いのではないか、という所感を得ました。自分た
ちの生活を顧みることなく、社会の今と行く末を
考えるのはまるで根無し草のようです。グローバ
ル社会はすでに私たちの生活に埋め込まれていま
す。当たり前のように消費し続ける生活から脱却
し、自分たちの足元にある身近な現実をしっかりと
と見つめ直せば、生活に即す社会に開かれた学び
が実現できることを自由学園は示しています。

あわせて、他者とともに自分たちの生活を「共
創する」プロセスには、不自由さが伴って当然で
あり、その不自由さを乗り越えたときに、互いの
自由が実現することを自由学園は示しているよう
に感じます。「何かあれば丁寧に話し合って解決
する」「自分たちでやれることを率先してやる」「他
者のために時間を割く」などの価値観を教師と生
徒たちは共有しています。「私たちの生活のあり
方が未来の社会の姿につながる」という発言が生
徒から出てくることに驚きと同時に頼もしさを覚
えました。自由学園女子部のさらなる挑戦に、今
後も期待です！

column

羽仁もと子・吉一夫妻が、今の自由学園女子部を ご覧になれば、何をおっしゃるでしょうか？

私が常日頃から考えていることです。きっと今の時代こそ、もっと社会と関わり、
社会に働きかけなさいとおっしゃると思います。例えば、日本各地で災害が続い
ています。すぐにも被災地に向き、災害ボランティアや復興ボランティアに関
わるなど、もっとできることがあるだろうと叱咤激励される気がします。グローバル
レベルでは、2015年9月に国連サミットで「持続可能な開発目標」(SDGs)が
採択されました。その達成に向けて貢献できることも考える必要があるでしょう。

今次の学習指導要領改訂で掲げられた教育については、これまで十分にやって
きたという自負があります。むしろ、その先を見据えて、「生活即教育」の理念を
継承しながら、もっと社会と関わり、社会へ働きかけていく本物の学びをどうダイ
ナミックに展開していくか、それが今後の挑戦になるのだと思います。

(自由学園女子部長 佐藤 史伸先生)

【緊急企画】自由学園のみなさんに直撃インタビュー！！



今回のインタビューについて一言お願いします

今回、私たちが大切にしていることを、彼女たちなりにしっかりと受け止めていることが分かり、嬉しかったです。彼女たちが社会に出た時に自由学園での学びの真価が発揮される、そう確信しています。(自由学園女子部長 佐藤 史伸先生)

INTERVIEW 1

委員長経験者



下級生からすれば委員長は「スーパーアイドル」のような存在！学年が上がるにつれて「全体の責任を負う」委員長にかかる重圧は「次元が違う」ことに気づき始めるようです。そんな委員長に自分が選ばれたとき、真っ先に頭に思い浮かぶのは「ああ…」「なんで?」「私にできるかなあ…」という「困惑」や「不安」な気持ち。ただ、その反面、「嬉しさ」を覚えたり、すぐに「これからのこと」を考え始めたりしている自分もそこにはいた模様。

「私に票を入れてくれたということは信頼してもらっている証拠」であり、「みんなの支えを感じる」からこそ、「覚悟」を決めたと語る経験者たち。委員長を経験し、「全体を見る」「色んな立場の人のことを考え、みんなの声に耳を傾ける」「時には引っ張り、時には支える」「みんなが気づいていないことに気づき、励ましを与え改善していく」などのリーダーとしてのあり方を学び取ったようです。

また、自由学園での学びをふり返ってもらうと、「自由学園には選択できる自由がある」という言葉が真っ先に出てきました。「自分の楽な方に流れるのも、そうでない選択をするのも自分の判断」。だけど、「自分勝手な自由ではなく、まわりの人のことも考えた自由」を模索するための「話し合いの場と機会がとにかく多く」「人のために時間を割くことが多い」と言います。そのおかげか、今では「困っている人を自然に助けられるようになった」とのこと。

自由学園の生徒たちは「もっと上を目指そう」「さらなる高みへ」というぐあいに、「互いに励まし合い、話し合い、改善をあきらめない」「どうしたらいいのかを考えることが習慣」になっており、「日々、進歩しようとする私たちの生活のあり方が次の世代、次の社会のモデルになるのだと思う」と力強く語ってくれた彼女たちでした。

なぜ「木の学びー80年使える机・椅子を考えるー」プロジェクトへの参加を希望したのか聞いてみたところ、「机や椅子をデザインすることに魅力を感じたから」「プロジェクトの話聞いて木と自然に関心をもったから」「何十年に1回の貴重な機会だったから」「雑木林が好きだから」などと動機は十人十色。

彼女たちもまた委員長経験者たちと同じように「自由学園には選択の自由がある」と言います。「やることが多すぎてかなり忙しい」！けど「自分を置く場所を自分が選ぶ」ことができ「やりたいことがどんどんできる環境」だと、日々の大変さを笑顔で語る様子が非常に印象的。もちろん、「自由の裏には責任がある」という考え方も共有しており、「一見不自由に見えるかもしれないが、生活の土台ができてこそ、自由になれる」という発言も。

そんな彼女たちは、今回のプロジェクトへの参加を通じて、「これからの自

分たちの生活を真剣に考える」ようになったとのこと。「家具屋に行っても家具を見る目が変わり」「森林のニュースがよく聞こえるようになった」という変化を実感しています。また、「机に落書きする人は許せない」「丁寧に使ってもらえるようにみんなに働きかけていきたい」というように、自分たちが手がけた机や椅子に強い愛着をもっている様子も見受けられました。

今回の経験で「森をつくっている人たちのおかげで今の私たちの生活が成り立っていること」を知り、「もっと自然と生きていけるように働きかけていく」「まわりの人々のために行動していく」ことの重要性や必要性も認識するようになったようです。「学べることは全て学び」、その「学びをムダにしないよう」「下級生に何を残していけるのか」。彼女たちの「森林に命を返す持続可能な循環サイクル」の実現に向けた学びは、彼女たちの手によって後輩に引き継がれようとしています。



INTERVIEW 2 プロジェクト参加者

※「J」は生徒たちの実際のことを引用しています

先輩はもがく、されど進む

平成30年3月卒の卒業生の中から、4月から教壇に立たれている先生方に近況報告やメッセージをいただきました。

公立 高等学校

添原 久仁子先生（英語科）

皆さんは充実した大学生生活を送れていますか？ 私が教師になろうと決めたのは去年の教育実習後で、それまでは今とは全く違う職種に就きたいと思っていました。その頃は教員採用試験の一択で大丈夫なのだろうか、自分は教師としてやっていけるのだろうかとたくさんの不安があり、悩みました。しかし、今振り返ってみると自分の選択した道は間違っていなかったと思います。

教師としての生活がスタートしてから約3カ月が経ちますが、1日1日があっという間に過ぎていく感じがしています。学校運営に関する仕事を覚えたり、部活動の指導や専門教科の指導をしたりと忙しい反面、充実した日々を送れています。そんな毎日を過ごす中で、

生徒の成長を見ることができるのが教師としてのやりがいであると思えました。生徒と出会ってまだ数カ月の間にも成長していく姿を見ることができるのは教師だけの特権ではないかと思っています。さらに、生徒と年齢が近いからかもしれませんが、毎日生徒と話をすることがとても楽しく、元気をもらうことができます。

もし皆さんがまだ将来の選択で悩んでいたとしても焦らずに、悩みながら自分の思う道を選択してください。その判断が良かったかどうかは実際にその道に立ってからしかわかりませんが、きっと良いものになると思います。一生に一度しかない貴重な学生生活なので1日1日を大切にしてください。

公立 中学校

井上 香織先生（国語科）

教師として現在の学校に着任し、数ヶ月が経過しました。

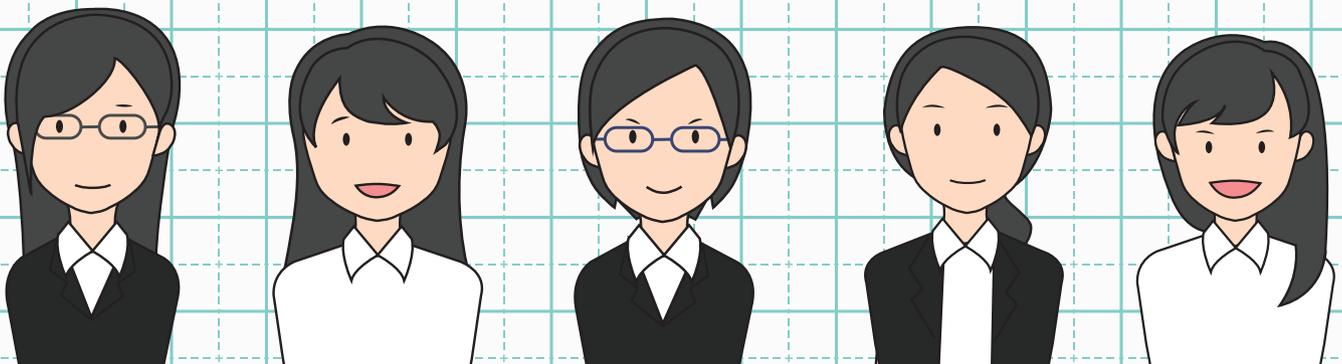
実際に教師として働いてみると、大学にいたころに学んでいた学校という職場の難点、特に『時間の無さ』を目の当たりにします。学年の授業だけでなく、担任業務や保護者への対応、校務分掌、部活動における細かな事務、様々な仕事が学校にはあります。まだまだ環境になれない中、他の先生方に助けてもらいながら何とかこなしていくのがやっとの状態です。

しかしそんな状態でも、生徒や保護者の方々は、新人もベテランも変わらない授業のクオリティを求めてきます。年数がどうであろうと等しく『先生』だからです。授業をするたび、何か失敗をする

たび、『教員としての責任』という言葉がのしかかり、自分の至らなさに落ち込むこともありました。

しかし、生徒たちと過ごす時間は目まぐるしくあっという間で、落ち込む隙すら与えてもらえません。賑わい笑顔を見せてくれる生徒たちを前にすると、悩んでいたことなどすっかり忘れて一緒にしゃべっている自分がいます。

ここ数ヶ月教師として過ごして私が感じたことは、『ありのままでもいいんだ』ということでした。自分の中でどれだけ理想が高くあっても、生徒たちの前にいるのは今の私でしかないのだから、無理に見栄を張らなくていいのだと。これからも胸を張って、ありのまま、子供たちと共に歩いていく生活を送っていきたいと思います。



私立 中学校・高等学校

遠藤 理子先生（家庭科）

皆さん、こんにちは。私は今年の3月に昭和女子大学を卒業し、4月から私立中学校・高校で家庭科の専任教諭として働いています。現在は高校3年の副担任をしています。

初めに少しだけ、私の話をさせてください。私は大学2年まで教員を目指していませんでした。しかし友野先生、青木先生、緩利先生の教職の授業を受ける中で教育の面白さに触れ、私も子ども達が未来へ一歩踏み出せるよう背中を押せる教員になりたい、と強く思うようになりました。

そんな私の教員になる夢が叶い、現在の職場に出会いました。教育の現場は本当に大変で、授業準備だけでなく行事、生徒対応、

諸会議……と挙げるときりがありません。日々、様々なことに悩みながらも立ち止まらず、かといって適当ではなく繊細に（気持ちも仕事も、物理的にも）全力疾走をしています。こんなことを書くと、皆さんは「教員は大変」と思うことでしょうか。その通り、大変です。現代では教員について何かと話題になっています。

そこで、私からのお願いです。教職課程を取っている皆さん、教育から目を離さないでほしいのです。現場の教員は一人ひとり子ども達の未来のため日々奮闘しています。確かに仕事量が多く大変ではありますが、私はこの仕事に未来を感じています。教員を目指している人もいない人も、遠いようでとても近い「教育」について考え続けてほしいのです。日々の学びは一生の宝物になります。

一緒に未来を考えませんか？

公立 中学校

兼子 なみ樹先生（家庭科）

私が教員になり、最初にぶつかった壁は、1年目でも、1か月目でも教員は教員ということです。生徒や保護者と関わっていく中で、多岐にわたる分野の知識の浅はかさを痛感しました。初めてのことで分からないことはたくさんあります。でも、生徒や保護者にとっては教員が何年目かは関係ありません。

教員は、なる前からの準備と日ごろからの人間性がとても重要だと感じています。そのため大学生のみなさんには、新聞を読むこと・多種の本を読むことを心からおすすめします。また生徒にどのように成長してほしいのか、そのために何を伝えたいのか、自分の教員観を考えておくことも大切だと思います。生徒指導をするにも授業を

するにも、すべてこれが土台になってきます。

また1学期を経て、教員は学び続けることが使命だと思っています。常に「先生」として見られることを重荷に感じてしまうこともありました。それ以上のやりがいを感じています。生徒の笑顔が、1番のモチベーションです。教員になってから、やっておけばよかったと後悔することは多々ありますが、大学時代のアルバイトや旅行等の経験談は、生徒の関心がとても高いです。話や教材のネタは、日常生活にたくさん転がっているので、今のうちから簡単にネタ集めをしておく、生徒の心を掴むことができますよ！

自分が教員になったときのことを考え、わくわくするような妄想をしてみてください。

私立 中学校・高等学校

松川 春菜先生（社会科）

自分の努力が結果に繋がらず夢を諦めそうになっていた大学4年生の年末、縁あって採用のお話をいただき、現在教員として働いています。実際の現場で働いて数か月が経ちますが、自分の圧倒的な力不足を痛感する日々を過ごしています。教科の知識不足はもちろんのこと、生徒の指導の仕方、部活動の指導、保護者対応などわからないことだらけで、毎日どこかしい気持ちを抱えています。しかしこの状況は成長できるチャンスだと前向きに捉えています。わからないことから学んだ失敗や反省を迅速に次に活かすことが成功や達成感に繋がります。この積み重ねが自信や経験として財産になるのではないかと考えています。

大学生の皆さんはこれから本格的に就職活動が始まると思いますが、「最後まで諦めない強さ」が一番大切だと考えています。私は大学4年生の5月頃から年末まで、50校近くの学校の書類審査や面接、筆記試験を受けました。周りの友人が内定をもらう中、一人で戦い続けた日々は本当に苦しく、何度も諦めかけました。その度に夢を再確認し自分を奮い立たせました。今では最後まで努力して良かったと思っています。

教師という仕事は大変ですが、生徒と共に歩み、成長することができる素晴らしい仕事だと感じています。どうか最後まで諦めず、夢を追い続けてください。皆さんと共に学ぶことができる日を心待ちにしています。



昭和女子大学現代教育研究所
Institute of Modern Education
Showa Women's University

現代の教育課題の探求と本学園の存立理念の確認という

二つのテーマを柱とした研究所です。

現代教育研究所は、現代の教育課題の探求と本学園の存立理念の確認を目的とした研究所です。総合学園として学内のネットワークを構築するとともに、学外の研究者、教育関係者はもとより、様々な教育機関や研究機関と広く連携を図り、研究成果や提言の発信を行っていきます。

時代の流れに敏感でありつつ、それに流されることなく教育について自由闊達に議論考察を行い発信する拠点としたいと考えます。

WEBSITE : <http://iome.jp/> **MAIL** : kyoikuken@swu.ac.jp

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate
vol.3

■編集■

EduMate 編集部

■発行■

昭和女子大学現代教育研究所

■発行日■

2018年12月22日